

## 第3話 英語会話事始め

(その1)



1945年8月15日。中学3年生。終戦の詔勅は茨城県古河市で聞いた。何だかよくわからないことばだらけだったが、戦争が終わったらしいということは理解した。

元来私の家は東京北区の王子にあったが、終戦の年の3月14日の空襲で家を焼かれ、暗い空から火の玉のようになっておちてくる焼夷弾の下を親子3人命からがら逃げのびた。ただ、その時吸いこんだ油性の煙がもとで私は肺をいため、戦争の直後は療養のため学校を休んで家でブラブラしていた。もはや飛行機設計の夢も消え、戦争の終了は私にとりつくしまもないという感覚だけを残した。

古河市の郊外には小さな飛行場があった。これを占領するためにアメリカ軍が進駐して来た。小さなジープや大きな輸送車がごうごうと音をたてて町の中を通りすぎた。そ

の物量の豊かさは驚くばかりで、子どもながら、よくこんな相手と戦争をして今までもちこたえられたものだ、と考えた。それよりも、私は車に乗っている「アメリカ人」なるものに大いに興味をそそられた。はじめて見る外国人であった。からだは大きいがそれまで「鬼畜米英」ということばから描いていたようなイメージとはまったく程遠いと感じた。どの人も朗らかで健康そうで、しかもタラフク食べて肥っているようであった。

そのころ古河市の中央には勤労働員署という建物があった。飛行場を占拠した軍隊は毎晩この建物に警備のための歩哨<sup>ほしやう</sup>を立てるようになった。どうせヒマをもてあましていた私は、この歩哨を「見物」に行くことを思いついた。そしてある晩何ということなしにこのこ出かけたのである。

建物のワキには大きな掲示板があった。私はそこにかくれ、おそるおそる建物の入口のほうをのぞいた。「いた！いた！」いつか見たアメリカ人がひとり、建物の石の階段のいちばん上にヘルメットをかぶり自動小銃を持って立っている。ふと私はその兵隊がかわいそうだなと思った。人っ子ひとり通らぬ異国の町の夜にポツンとひとりで立つ彼…彼は何を考えているんだろう。遠い故郷のことか、それともくにに残してきた恋人のことか、それとも幼い日の思い出だろうか…。

突然兵隊がこちらを見た。掲示板のところに人の気配を感じたのである。私はあわてて首をひっこめた。胸がどきどきしていた。相手は銃を持っている。へたをすればおな

かに風穴があく。こんなところに来るんじゃなかった。ここで死んだらオカアチャマがさぞなげくことだろう。こいつはエライことになった。かといっていまさらひくわけにもいかない。掲示板から一目散に逃げればうしろから射られるにきまっている。

私はもういちど掲示板からそうっと顔を出した。兵隊はこっちを見ていた。目と目が合った。もうダメだ！ 射られる！ でも、兵隊は別に銃口をこちらに向ける様子もなかった。かわりに彼は白い歯を見せてニコッと笑った。

「アメリカ人だって笑うときは怒っていないときにちがいない」と私は思った。でもテキはさるもの、「ニコッと笑って人を斬る」なんてこともじゅうぶんありうる。こいつはいっちょう追従笑いをするに限る…「生活の知恵」で考えた。私は精魂こめて、一世一代の大微笑(?)をやらかした。

「へんな子どもだな」と彼は思っただろう。私の方はいっしょうけんめいである。笑い顔をくずさぬように一步一步あとずさりして10メートルくらい離れたところでもぐるりとうしろを向くと、あとは一目散に走り出した。もうタマはとどかない、と思う地点まで来たとき、私はあえぎながら止まった。そして考えた。

「彼と英語でひとことでも話せたらいいなァ」

## 英語学習の壁

英会話の練習も一定のところまでいくと「壁」があるような気がします。つまり、「おはよう」「こんにちは」のようなきまりきった会話は、練習頻度に応じてますます自然に口をついて出るようになるでしょうが、それだけではどうにもならない「ある線」のようなものがあるのではないのでしょうか。人間の話している「ことば」の内容は多岐多様です。I'm sorry. That's all right. などのやりとりだけではないはずです。

私はかつてワシントンの道路上で、酔っぱらいにからまれたことがあります。このときは自分の「聞きとり能力」の限界をきとらされました。私は夫婦げんかの仲裁を買って出たこともあります。いまにも椅子をつかんで投げそうな Irish temper の奥さんをなだめるのに、ことばの不足をなげきました。東南アジアのユネスコ代表と政治的な論争をしたこともあります。思うことの万分之一も言えずに、はがゆいことおびただしかったのをよく覚えていています。

私は「英語つかい」にはなりたくありません。ことばを道具としてフルに活用したいと思います。内容のないペラペラは、じきに底を見すかされて、あきられてしまいます。会話がじょうずになりたかったら、そして、私のいう「壁」が破りたかったら、単なる話術の修得ではなく、その上につき重ねる「ことば」を通しての広い教養を身につけるべきだと思うのです。基礎工事を完了した人に対しては、その上に積むべき石の性質をよく見きわめてほしい、と言いたいのです。